Owner Interview

ダックテキスタイル 株式会社

代表取締役社長 三原 龍二 様

広島県福山市のダックテキスタイルは、主にデニムなどの綿厚地織物（ダック）を扱う専門商社として1983年に創業しました。その後、新規事業として取り組んだ不動産事業は、今や本業のテキスタイル（織物）事業に匹敵する規模にまで成長しています。代表取締役社長の三原龍二様に、同社のあゆみや不動産事業に関する考えを伺いました。

不動産事業で経営基盤を強化し福山デニムの活性化に貢献する

江戸時代、福山市周辺の地域は普段使いの和服に用いられた絣（かすり）という織物の産地として知られ、その産品は特に「備後絣」と呼ばれて人気を集めました。やがて、綿厚地の織布や藍染めといった絣の技術が転用され、一帯はデニムの産地へと生まれ変わります。同市でデニム生地などの企画・販売を行うダックテキスタイルは、2023年、創業40周年を迎えました。地場産業の担い手としては比較的、新しい会社といえます。

国産ならではの高品質なデニムを展示する本社ショールーム

創業者は三原龍二社長の父健治氏で、勤務していた地元の繊維会社を辞めて独立すると、豊富な人脈を活かして近隣のカジュアルパンツメーカーや量販店に顧客を広げました。また、ケミカルウォッシュのジーンズやレーヨン系カジュアルパンツなど、数年ごとに生まれる流行を販売機会の拡大につなげて成長しました。

「当時は時代背景もよかったのでしょう。90年代半ばまでは、まだ地元に多くのアパレルメーカーが残っていて、ほかの商圏へ進出しなくてもビジネスが成り立っていました。その後、時代の変遷とともに新たな販路の開拓が求められるようになります。家業に戻る前、私は東京のテキスタイル業界で働いていたので、そのときの経験が役に立ちました」

三原社長は、同社の転機となった東京進出の背景をそう振り返ります。

20年がかりで実感した東京の優位性

大学卒業後、繊維会社に入社した三原社長は東京で4年ほど勤務したのち、90年、家業に戻りました。そして、98年から東京エリアの開拓に取り組み、展示会などにも積極的に参加して、販路を広げました。折しも「ジュニアブーム」と呼ばれた高級子供服ブランドの流行が重なり、2000年代初頭には東京エリアの顧客が200社を超えるまでに拡大しました。

一方、このあたりの時期から本業を支える新たな柱となり始めたのが不動産事業です。

「87年に福山市の中心部でテナントビルを取得して以来、当社では中国地方でビジネスホテルやマンションの購入を進めていました」

当初は事業化の明確な意図はなかったと、三原社長は振り返ります。「繊維業界の場合、専門商社はメーカーのビジネスモデルとは違って、不動産を取得することによって事業基盤の強化を図るケースが少なくなかったのです」

その後、03年に先代が急逝し、事業承継後に三原社長は不動産事業への本格的な参入を決断します。経営の安定化を図るため、成長性を重視しながら、中国地方以外のエリアでも物件を取得していきました。

札幌、東京、大阪、福岡の各都市に拡大した不動産事業は着実に成長し、現在では本業に匹敵する規模にまで売り上げが増加しています。その過程で存在感を増してきたのは、東京での事業展開でした。ボルテックスとの出会いをきっかけとして進出した17年以降、主にハイグレードオフィスビルを取得してきました。

「これまでの推移から、今では資産価値が下落する恐れが低い東京の優位性を実感しています。ただし、事業を本格化させた頃の状況では、収益性の重視という当初の方針も間違いではなかったと考えています。一定の収益性を確保し続けたことにより、結果として東京での不動産事業の展開が実現したからです。東京の資産価値を実感し、それを事業の柱にするまで20年近くかかったことになりますが、それもまた、地方で不動産事業を継続してきたからこそわかった成果だと思います」

SDGsで期待される国産デニムの再評価

今後も不動産事業の安定した成長が見込まれる中、祖業であるテキスタイル事業の市場からの再評価にも活路を見出したいと、三原社長は考えています。

先代の下、三原社長が東京エリアでの販路開拓に着手してから10年後の08年には、同エリアでの顧客数が300社にまで拡大しました。その後も東京・原宿事務所のスタッフを増員して顧客に対するサポート体制を強化しつつ、17年にはショールームを併設し、さらなる販路開拓に挑んでいます。

また、地場産業の復活に向けて、自治体や業界団体、地元企業との連携も視野に入れています。海外の繊維産業では、製造工程での水質汚染や大量に水を使う環境負荷がしばしば指摘されていますが、国産デニムはそれらの問題を克服してきました。福山市など備中備後地域のデニムメーカーは、製造過程のCO_2排出や水の使用量を大幅に削減するなど、環境にやさしいものづくりを続けており、SDGsの世界的な潮流は追い風といえます。

「サステナブルな社会をめざす機運が高まる中で、近い将来、環境に配慮した国産デニムが再評価される可能性は十分にあります。次世代に向けた土台づくりにも見通しが立ち、昨年は他社で働いていた息子が戻ってきました。時代の変化を前向きに捉えて、福山デニムの活性化に少しでも貢献したいと思います」

お客様ご紹介

ダックテキスタイル 株式会社

代表取締役社長 三原 龍二様

1963年広島県生まれ。大学卒業後、繊維会社勤務を経て90年にダックテキスタイル入社。92年代表取締役専務、2003年代表取締役社長に就任。座右の銘は、趣味であるゴルフの格言「Play the ball as it lies（あるがままに）」。どんな状況も悲観せずに受け入れ、前向きに取り組むという経営観に通じる。

https://www.ducktex.co.jp

［所 在 地］〒720-2124 広島県福山市神辺町川南334-3
［事業内容］テキスタイルの企画・販売、不動産賃貸管理等

ご保有物件のご紹介

（2017年12月撮影）

VORT 芝大門Ⅱ

（港区・区分所有オフィス）

DATA

［専有面積］	192.28㎡（58.16坪）
［最寄駅］	浅草線・大江戸線「大門」駅 徒歩3分 三田線「御成門」駅 徒歩5分 JR各線・東京モノレール「浜松町」駅 徒歩7分
［構造・規模］	鉄骨鉄筋コンクリート造陸屋根 地下1階付9階建
［総戸数］	8戸
［築年月］	1990年10月　新耐震基準適合
［敷地面積］	265.58㎡（80.33坪）
［延床面積］	1,924.75㎡（582.23坪）